

立命館大学日本文学会の四十周年にあたって

一九九四年度会長 彦 坂 佳 宣

今回の「論究日本文学」は立命館大学日本文学会四十周年の記念号として計画されました。四十周年の事実をいちはやく我々に気付かせてくれたのは、運営委員の総務として実務の万端を担当する真下・赤間両先生であつたように思います。

その記念事業として、各方面にはかり、(1)記念大会をもつこと、(2)学会活動を支える募金を募ること、(3)年一回の刊行である「論究日本文学」を年二回の発刊にすること、の三つを計画しました。あわせて、談話会の持ち方や国語教育セミナーなどの方にも工夫をこらしました。数年前のことであつたと記憶しております。

さいわいにも、卒業生会員をはじめ院生その他の協力で、(2)の募金活動は九十四年末の段階で目標を達成し、(3)の機関誌の年二回発行も前倒しの形で実現して、強化された談話会や国語教育セミナーでの発表もこの発刊の継続的な支えとなつております。また、会員論文の掲載の機会も増え、なかには博士論文の一部となつたものもあります。

そして、九十四年十一月二十七日には(1)の記念大会を開きました。本号は、その大会での三つの講演をもとにした原稿が主となつております。講演は、今日の立命館大学文学部日本文学専攻の基礎を作られた初期の先生方の業績と人柄をしのび、その遺徳を今後の活動の糧にしようとする意図でありました。掲載された原稿を読まれる読者には、自己の教育や学問との関わりに応じて、取り上げられた三人の先人についてのさまざまな像がむすばれるものと思ひます。また、記念大会に出席された方々には、講演された三人の先輩の声の記憶をとおして、その像はさらに印象ふかいものとなるでしょう。

これらの先人の他にも、岡田希雄・宮島弘などの先生方の名が思い出されますが、都合により今回の講演には含めることが出来ませんでした。

さて問題は、こうした機会を通じて得た体験や感慨を、今日のわれわれがどう引き継ぎ伸ばしていくかということでしょう。

一九五四年七月に創刊された本誌の末尾には、日本文学会の産声の模様、夏期日本文学講座の内容、本誌の年三回刊行を季刊にさらには月刊にまでもっていくことなど、希望にあふれた決意が述べられています。聞くところによれば、年三回の刊行はしばらくの期間におわたつたようですが、その結果は結果として、はたしてわれわれに発刊当時の気概に等しいものがあるでしょうか。

四十周年を迎えたいま、先人の業績を思いつつ、心を新たににして、そこに何を加えるかということを考える機会にしたいと思います。